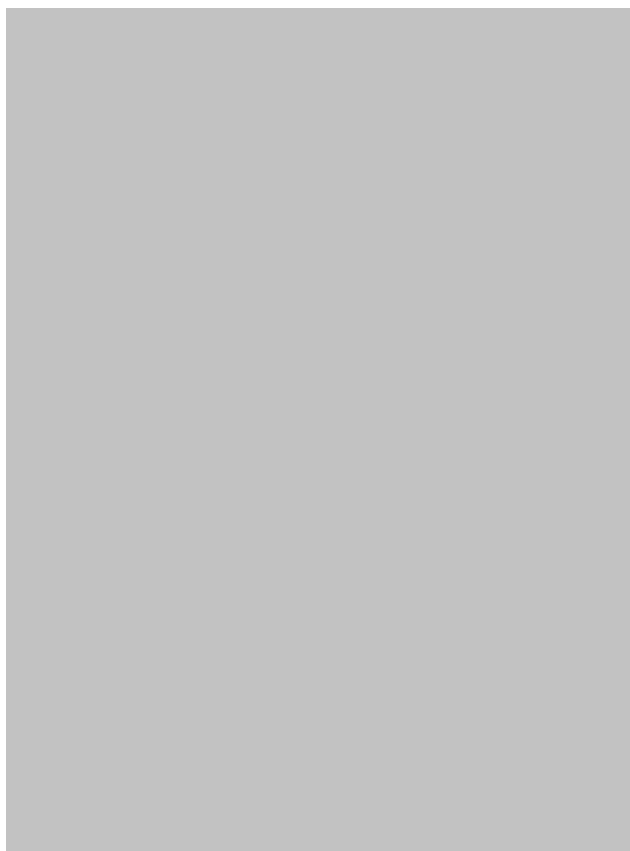


大竹伸朗

《網膜（ワイヤー・ホライズン、タンジェ）》



大竹伸朗(1955-)
《網膜(ワイヤー・ホライズン、タンジェ)》

1990-93年
油彩、写真、オイルスティック、
ウレタンペイント、樹脂、
布、紙、ホチキス、
ハトメ等・木製パネル
274×187×20cm
平成27年度購入
© Shinro Ohtake

大

竹伸朗の作品の多くは、ポップとジャンク、二つの系譜に分けることができます。本作は、一瞥する限り後者に属すると言えるでしょう。青を基調とした画面の上には五本の帯が垂直に走っていて、そこにはゴミ箱から拾われてきたような、様々なイメージが貼り付けられているのですから。

目につくのは動物の写真です。猿、トカゲ、人間の頭蓋骨等々。幾何学的な紋様の刺青の写真がいくつもあるのは、刺青が、洞窟の絵と同じように「絵画」の起源のひとつとも言われているからでしょうか。女優のプロマイドやモロッコのディルハム紙幣など、ポップ・アートによくあるイメージ（というかそれそのもの）も見ることができます。つまり、ジャンクとポップとアートの起源とがごちゃまぜになっています。画面の上半分では針金が水平に走っていますが、イメージはなく、垂直方向の喧噪を断ち切るほどではありません。でも、針金という物質は絵画としては異質です。その存在感ゆえ、タイトルの一部に「ワイヤー・ホライズン」という言葉が見えるのでしょうか。タイトルには「網膜」というちょっと謎めいた言葉も見えます。大竹は、この言葉を冠したシリーズを一九八九年頃から制作していました。

網膜と絵画で思い出されるのはマルセル・デュシャン。倒した便器にサインを書

いて展覧会に出品することで美術の在り方を変えてしまったあのアーティストです。実は彼も、当初はセザンヌや未来派に影響を受けた絵画を制作していました。しかしそのうち、当時の絵画では「網膜があまりにも大きな重要性を与えられている」（大竹伸朗「作品制作は世の中のわからないことを理解するための手段」『美術手帖』二〇〇六年十二月号、八九頁）として、そうした網膜的な絵画を批判するようになります。

大竹は、ゴミジャンクというレイイメイド（すでにそこにあるもの）を使うことはデュシャンに大きな影響を受けています。ですが、ポピュラーカルチャーを愛する者として、網膜的快楽を否定せず、むしろ「ゴミ」とかけあわせることでその快楽を変容させるべく（あるいは快楽の本質へと近づくべく）作品を制作していったのだと言えるでしょう。レコードジャケットやMTVなど、ポピュラーカルチャーと網膜的快楽は、緊密な関係にありました。

タイトルに見えるもう一つの言葉、「タンジェ」とは、タンジールの名前でも知られるモロッコの都市のこと。大竹は同地を著作の執筆のために一九九三年七月に訪れています。本作で垂直に連なっている帯は、マーケットの喧噪の中で様々なものがぶら下げられている店先の光景を反映しているのかもしれませんが。

（美術課主任研究員保坂健二朗）